

なにをするにも一生懸命

旭区支部 伊東 昭子（妻）

戦没者 伊東 正司

戦没地 ニューギニア

主人がニューギニア島で戦死したのは昭和十八年一月十八日でした。

亡くなる前年十月に召集令状が来て、三ヶ月後のことでした。

その間、私宛に葉書が一通来ただけで、残されたときは長男が初めての誕生日を迎える前で、私が二十六歳のときでした。

父が左官業をしており、腕のいい職人で父の目になつた主人でしたから、仕事は出来た上に几帳面できれいだ好きでした。

今と違って休日は家族で出かけると言つた時代ではなかったのですが、東京麻布で所帯を持つたとき、二、三回芝居小屋に連れて行つてくれたのが唯一の思い出です。

主人が死んでも悲しんでばかりはいられません。子供はいるし、自立しなければ、幸いに私は健康に恵まれていました。八十代までひとりで東京見物に行かれる位で、九十三歳の現在、病院の世話になつたのは出産と八十四歳のとき白内障の手術で四日間入院したときだけで、その時、

点滴を初めてしました。骨密度も医師から太鼓判を押されました。

もう一つ恵まれたことは、手先が人さまより器用だったこと。着物は先生につかなくても、本を読み、着物の裏地を観察して作れました。

そんな私を叔母が、学校に行き洋裁で身を立てよと教えてくれ、洋裁学校に行ったのは三十五歳のときです。私の置かれた環境と手先の器用さ、そして私の明るさが後押しをしてくれ、洋裁の仕事は注文が多く順調でした。

今でも忘れないのは、お菓子屋さんや銭湯の奥さんの親切です。当時は下町のやさしさが残っており、人と人の間に垣根が存在しないと言うよき時代でした。

洋裁の仕事があり、健康に恵まれ、長男も私の背中を見て育ったので、やさしく母親思いで有難いことです。

現在、長男夫婦と同居していますが、朝四時に起床して、朝食・夕食は私が作っています。毎日のようにスーパーに行き、献立をあれこれ考えています。

今、洋裁の代わりに、編み物が好きでマフラーを編んで、人さまにプレゼントして喜んでくれるのを楽しんでいます。

已年生まれば着る物に困らないと言われていますが、私にはこの言葉は当てはまりませんでしたね。下着以外は全部自分の手作りの服を三百六十五日着ています。

左足が神経痛のため不自由なことで難聴であることが心配ですが、主人より三倍以上も生きることが出来て、幸せな一生だと思っています。